

ネンノリーナ、ローマの少女、列福へ

2007年12月17日、教皇ベネディクト16世は、1937年骨肉腫で6歳半の若さで死去した、アントニエッタ（Antonietta Meo）英雄的徳を実行したとする列聖省の判断を了承した。

教皇はこの少女について、12月20日行われたイタリアのカトリック・アクションの青年たちとの謁見で触れられた。「（彼女は）とても単純素朴で、同時にとても重要な人です。と言うのは、聖性があらゆる年代の人のものだということを証明してくれましたから。聖人になるということは、子供にとっても、青年にとっても、大人にとっても、老人にとっても可能なことだと」

手続きが順調に進めば、アントニエッタは歴史上最年少の（殉教者でない）聖人となるだろう。

生涯

アントニエッタ・メオは1930年12月15日にローマの裕福な家庭に生まれた。父はミケーレ・メオ、母やマリアで、彼女は第四子であった（二人の兄弟はともに早世していた）

ミケーレは内閣官邸の書記官で、マリアは家事に専念していた。家政婦を一人雇っていたが、二番目に来たカテリーナはネンノリーナの遊び友達となった。メオ一家は小教区の教会に熱心に通い、よく家族でロザリを祈っていた。その家はエルサレムの聖十字架教会の近くにあった。ネンノリーナはその教会で洗礼を受けた。12月28日、幼子殉教者の祝日のことである。

家では初めは「ネンネ」と呼ばれたが、後に「ネンノリーナ」と呼ばれるようになる。姉のマルガリータによれば、彼女は「同じ年代の他の子供と同じく、快活で、よく動くやんちゃな子」だった。1933年10月、3歳のとき、シスターたちの経営する近くの幼稚園に行き始めた。ネンノリーナはそこがとても気に入り、楽しくて「夜でも行くわ」と言っていた。

シスターたちによれば、その子は利発で、理解が早く、年の割には成熟していた。3歳を少し過ぎた頃「イエス様、大罪を犯すくらいなら、その前に死ぬ恵みをお与え下さい」と祈っていたと母は言う。4歳でカトリックアクションの「幼児部」に入り、5歳になると「少女の最年少部」に移った。

病気

5歳になる前に、両親は子供の左膝にかなりの腫れがあるのに気がついた。医者に見せに行ったが、色々の間違った診察をした末に、骨肉腫と診断された。

1936年4月25日、ネンノリーナは左足の切断手術を受けた。最もショックを受けたのは両親であった。アントニエッタはこの不幸を驚くべき剛毅で受諾し、父親を慰めようとさえした。「私はイエス様がこの不幸を送って下さったことにとても満足しているの。だから私はイエス様から特に愛されている子供なのよ」と言って。その時から整形外科の危惧を付けねばならなくなったが、以前と同じような遊びを続け学校にも通った。

イエスへの手紙

両親は彼女の初聖体を早めることを決めたが、それはネンノリーナをことのほか喜ばせた。毎晩、母親は少しの時間を割いて彼女にカトリック要理を教えた。アントニエッタはこの時間を利用して、母にイエスへの手紙（彼女は詩と呼んだ）を書き取ってもらった。そうして「イエス様が夜のうちに来られて読むため」と、その手紙を幼きイエスの小さなご像の下に置いた。母親は、それは「遊びのつもりで始まりました」と証言している。最初の手紙は1936年9月15日付けである。

手紙の中で少女は子供らしく飾り気のない愛をイエスと聖母と両親に表している。それと同時に、神が自分を償いの道に招いておられるという明白な自覚　そんなに小さい子供には驚くべきことだが　が見て取れる。たとえば、「主イエスよ、人々の靈魂の救いを下さい」(直訳は「靈魂を下さい」)と何度も繰り返している。

ネンノリーナはペンで書けるようになると、手紙に「アントニエッタとイエス」とサインをし始めた。イエスに宛てられた手紙は合計すると105通にのぼり、その他に聖母、父なる神、聖霊へのもの、聖アグネスと幼きイエズスの聖テレジアにそれぞれ一通書いている。また、母親と父親、そして姉のマルガリータにも出している。いつも自分の周囲の人々と罪人のために恩恵を願っていた。

ネンノリーナはこれ以上ないほど自然にイエスとマリアに話しかけていた。シスターたちによると、しばしば教会から出るときに、聖櫃の近くに来て、「イエス様、一緒に遊びに行きましょう」と呼びかけていたようだ。「愛するイエス様、明日は一緒に学校に来て下さい」と書かれた手紙もある。

告白、初聖体と堅信

まだ5歳半だったとき、告解をしたいと言った。そして、自分を聖人に導いてくれるよい聴罪司祭を紹介下さいとイエスに頼んでいる。この秘跡を受けるために一生懸命に準備した。

初聖体の数日前、恩寵をリンゴの種の中にある白い物体と比較している。1936年のクリスマスイブに初聖体を受けた。ミサが終わると、整形外科の装置によって傷つくにも関わらず、手を胸の前で合わせたまま一時間じっと祈っているのをみんなが見ていた。ぴくりとも動かず、放心したようにイエスを礼拝しているその姿に、誰もが強い印象を受けた。その上、後で自分の最大の幸福は聖母の手からイエスを受け奉ることだとコメントした。

幻視

ノンノリーナには超自然的現象もいくつかあったようだ。1936年10月16日に「聖母が見える。ご絵のではなくって」と断言した。1937年1月には「ときどき私は十字架に付けられたイエス様が見える」と、3月には「昨日、復活されたイエス様を見たわ」と言う。5月には手紙を口述している間に恍惚状態に陥った。我に返るや「私が部屋の隅っこにイエス様を見たことを知ってる」と尋ねた。7月2日、彼女の最後の聖体拝領をした後、主を見たことと母親に告げている。

アントニエッタは1936年5月に堅信の秘跡を受けた。母の証言によれば、「堅信の秘跡を受けてから、アントニエッタの容態は徐々に悪くなった。荒い息と咳が、休むことなくあの子を苦しめました。座っていることさえできず、横にならねばなりませんでした。苦しんでいることがはっきり分かりましたが、いつもみんなに向かって『私は元気よ』と言っていました。私にさえも。」時々、朝と晩に自分の祈りをしていたが、そのあとで彼女はぐったりとなった。司祭に頼んで、毎日聖体を運んできてもらった。聖体を拝領した後の時間は、最も落ち着いた時間であった。

6月2日付けの手紙が最後の手紙となったが、その手紙は教皇ピオ11世の手に届いた。母はこう語る。「私はあの子の枕元に座って、アントニエッタが苦しい息の下で口述することを書きました。『愛する十字架上のイエス様、私はあなたと一緒にカルワリオにいたいです』と。そう言った瞬間、激しい咳に見舞われ彼女は嘔吐しました。それが静まるとまたこう続けました。『愛するイエス様、私は繰り返したい。あなたを愛しています。とても、とても、と。』苦しみながらそう言う彼女を見て、私に言うに言われぬ怒りがこみ上げてきて、便せんをくしゃくしゃにして、箱に入れました。」

教皇の祝福

数日後のこと、アントニエッタは教皇の筆頭侍医であったミラーニ医師の訪問を受けた。(略)。医師はアントニエッタの容態は極めて悪く、再び手術をする必要があると考えた。医師はその子と話して、あの激しい苦痛を不平一つこぼさずに耐えているのを見て驚きを隠せなかった。例の手紙のことで知り、最後の手紙を読んだ。そうして、教皇様にネンノリーナのことでお話ししたいので、その手紙を持って行く許可を願った。躊躇している母親を見て、ミラーニ氏は言った。「でもお母さん、教皇様に持って行くのですよ。」

翌日、教皇ピオ11世の特使が訪れ、教皇様はあの手紙を読んでとても感動されネンノリーナに祝福を送って下さったと伝えた。

死去

6月12日、ネンノリーナの容態はひどく悪化した。肺に水がたまり、呼吸をするのが大変であった。ひどい苦しみにさいなまれている小さい体を前にして、母はその子をなんとか励まそうとした。「もうすぐよくなるわ。そうなったらすぐ、みんなでバカンスに行きましょうね。・・あなたがあんなに好きな海岸に行きましょう。・・泳ぐことだってできるわ。」ネンノリーナは答えた。「ママ、喜んで頂戴。悲しまないで。・・私はここから10日足らずで出るわ」と。アントニエッタは自分の死去の日を示していたのだ。

ガン細胞はすでに体全体に転移しており、胸を圧迫した塊は心臓の位置を動かすまでになっていた。誰もが口を揃えて、苦しみの中で少女が希有な落ち着きを保っていたと証言する。母は娘の苦痛がそれほどではないのではないかと口走った。医師は答えた。「お母さん、冗談じゃない。これは体を切り刻むような痛みですよ」と。

ミケーレ・メオはこう証言している。「もうひどい重態に陥っていたので、娘に病者の塗油を受けさせよう決めました。そこでアントニエッタに『聖なる油って何か知っている』と尋ねると、『臨終の人に塗る秘跡でしょう』と答えました。私は彼女を恐がらせたくなかったので、『時には体の傾向も取り戻すんだよ』と付け加えました。そうするとアントニエッタは『まだ早いわ』と言って断りました。そこで私は黙りました。後で神父様があの子に秘跡は恩恵を増すと言うと、じっと耳を傾けていたアントニエッタは、『では、受けたいわ』と言ったのです。

1937年7月3日の早暁、ミケーレは枕の位置を変えるために娘に近づき、彼女に接吻すると、彼女が小さな声でこうつぶやいた。「イエス、マリア、・・ママ、パパ・・」そして父親の顔をじっと見つめ、微笑んだのち、深い息をした。それが最後の息となった。

埋葬と聖性の評判

ネンノリーナの小さな遺体を入れた棺は、ほとんど大群衆とも言える大勢の人々に付き添われながら、エルサレムの聖十字架教会に運ばれた。ネンノリーナの死後、いくらかの改心や特別の恵みが見られた。彼女自身が「恩恵の雨を降らせるわ」と言っていたことが、早くも実現していた。

その墓は感謝の手紙や依頼の手紙で覆われた。翌年には早くも彼女の伝記が出版された。

1938年12月、アントニエッタの切断された足は埋められていたが、父はそれを遺体とともに埋葬する許可を申請した。娘の死後16ヶ月後、その切断された足は腐ってはいなかった。ネンノリーナの評判は、ローマとイタリアの国境を越えて広がった。1940年には様々な言語で彼女の伝記が出版された。

1942年、当時カトリック・アクションの会長であったアルミーダ・バレリは、アントニエッタの列福調査の手続きを申請した。アントニオ・カイロリ神父を請願者として、列福調査は1968年ローマ教区の法廷で開かれ、教区での調査段階は1972年に終了した。

1999年5月5日、ネンノリーナの遺体は、聖十字架教会の中の、主のご受難に関する聖遺物が安置されている特別の地下礼拝堂に移された。その時以来、ネンノリーナの墓は大勢の信者の巡礼地となった。同じ1999年に、その教会でアントニエッタの私的信心を広める会が生まれた。

聖性には年齢の制限はない

彼女の列福調査の最初から、神がこの子供の人格を尊重しつつも、それを完成に導かれ、成熟した高德の大人でさえ滅多に見ることのできない、細やかな精神と苦痛の中での英雄的剛毅を与えられたことに、心理学者や神学者は大きな驚きを感じた。

二年前にファティマの牧童、ヤシタとフランシスコ・マルトが列福されたことによって、幼い子供たちにも英雄的な徳の実行ができることを認める道が開かれた。それまでは、古い伝統に従って、聖人と認められるにはキリスト教的徳を英雄的に長い間、何年も続けて実行することが必要だと考えられていて、そのために子供は除外されていた。しかし、1981年、列聖省が神学者、法律専門家、教育者、心理学者を集めてこの問題を検討した結果、その制限を廃止することに賛成が得られた。子供も信仰、希望、愛の徳を英雄的に実行できることが認められたのである。そのために、列聖されることが可能になった。

ネンノリーナは、162通の手紙の他に、堅信を受ける前の19日間に19の考察を書き残した。イエスとマリアに向けた言葉をいくつかを紹介しよう。

愛するイエス様、あなたが私の心に来て下さってこの上なく嬉しいです。私の心から離れないでください。いつも私と一緒にいて下さい。イエス様、私はあなたを愛します。あなたの腕の中に私をお任せしたいです。私を望みのままにして下さい。

愛するイエス様、私は今日散歩に出て、私のシスターたちのところに行きます。シスターたちに、私はこのクリスマスに初聖体をしたいと言うつもりです。イエス様、早く私の心に来て下さい。そうしたら私はあなたを強く抱きしめて、接吻します。

私の優しいイエス様、私に靈魂を、沢山の靈魂を下さい。心からそれを頼みます。彼らが良い人になって、あなたと一緒に天国に行けるようにして下さい。

私はあの大きな罪を犯した人のために祈ります。あなたは知っているはずのあの罪人、聖ヨハネ病院にいるあの大変年取った罪人のために祈ります。

愛する十字架上のイエス様、私はあなたが本当に好きです。私はあなたとともにカルワリオにいたいです。愛するイエス様、父なる神に伝えて下さい。私が御父もとても愛していると。愛するイエス様、私がこの痛みを堪え忍び、罪人のために捧げることができるように、あなたの力を下さい。愛するイエス様、聖霊に伝えて下さい。愛で私を照らし、その七つの賜物で私を満たして下さい、と。愛するイエス様、マリア様に言って下さい。私がマリア様をととても愛していて、マリア様の側にいたいと言っている、と。私の優しいイエス様、私の靈的指導者のために祈ります。神父様に必要な恩恵をお与え下さい。愛するイエス様、私の両親とマルガリータのために祈りません。あなたの子供が沢山の接吻をあなたに送ります。

PALABRA 532, III-08, pp.156-159.